



地球儀に 魅せられて

父の80歳の誕生日を祝うため、
贈り物を探し歩いたピーター・ベラビー。
その努力は徒勞に終わったが、
伝統的な地球儀製作技術の復活という
大仕事はそこから始まった。

文 ルーシー・コールズ



【前見開きページ】
地球儀に用いる緻密で
優美な地図はペラビーの
編集能力の証だ。
【当見開きページ】
紡錘形にカットした地図の
紙片(ゴア)を完璧に
貼り合わせるのに、
18カ月を要した。

伝統的な地球儀の製造法を記した指南書は、残されていない。だから興味を惹かれたのかもしれないと、ペラビー・グロブメーカーズ社を率いるピーター・ペラビーは追想する。「小中学校もカレッジも大嫌いだ。た。何事も自力で解決しなければ気が済まない性格で、人の指図は受けたくない。私がどんな子どもだったかを母に聞いたら、『おもちゃを片っ端から分解しては、組み立て直していた。なかには、元通りにできないものもあったけれど』なんて答えるんじゃないかな。」

そんな彼にとつて、「地球儀のつくり方を、誰からも教わらず、一から自分で考えるのは、ワクワクする経験」だった。この世界に飛び込む前、ペラビーはロンドンでハイクラスなボウリング場を経営していた。球体を扱うという意味では、共通点があるともいえる。伝統的な地球儀の製作は、手間がかかる、いわば重労働だ。「歴史的にも、傑出した地球儀職人は、ごくわずかで、しかも彼らはみな、技術を墓まで持って行ってしまった」。後を継ぐべき世代はしり込みし、別

の道を選んだのだろうか、ペラビーは考えている。現在彼は、ロンドン北東部のストーク・ニューイントンに、ロフトを改装した小ぢんまりとした工房を構え、婚約者と数人の職人たちと共に、専門技術を結集し、地球儀を製作している。2008年に会社を立ち上げてから7年。秀逸な地球儀を受注製造する彼らの事業は、すこぶる好調だ。個人向けが主流だが、豪華な社用贈答品や映画のセットを手がけることもある(マーティン・スコセッシ監督は「ヒューゴの不思議な発明」で「対の地球儀をペラビーに発注している」)。

ペラビーの冒険は、父親の80歳の誕生日プレゼントを探して歩き回ったことから始まった。紳士向けのギフト売場というのは、ひどく退屈な場所だ。さえないネクタイ、華奢な万年筆、変わりばえのしない靴下の行列。ペラビーは、すっかり意気消沈していた。造船技師として世界の主要な港を渡り歩く父は、息子にとつて新鮮な刺激を与えてくれる存在だった。プレゼントは地球儀にしよう。そう決めたものの、これはというものが見つからない。そこで、ペラビーは、自分の手でつくることにしたのだ。彼の人生の転機だった。

当初、材料と人件費あわせて数千ポンドと予算を見積もったのだが、とんだ見込み違いだった。「10万ポンド(約1850万円)でも足りないなんて、思いもしなかった。地球儀のつくり方さえ、ろくに知らなかったからね。結局、20万ポンド近くかかってしまい、車を売り、家も手放すことになってしまった」と彼は話す。「車はまだいいとしても、家までとはねえ」と複雑な表情を浮かべるのは、婚約者のジェイドだ。彼女はロフトの一角にあるペラビーと隣り合わせのデスクで、広報を担当している。「試行錯誤は大切だよ」とペラビーが反論する。「パツとひらめいて、思いもよらないことが起こる。そういう幸運に何度も恵まれて、ここまで来ることができたんです」。

最初の一步は、球体をつくることだった。円周率を掛けては試すの繰り返し。試行錯誤の末に、彼は繊維強化プラスチック製の(大型の場合は、強度を増すた



【左ページ】
 (上)「ザ・カーブ」の印象的なアルミ製スタンドは、アストンマーティンの伝統を継承する技術者の手で作られた。
 (中)「ミニ・デスク・グローブ」と大きめの「ザ・リビングストーン」は、伝統的なフィリップス地球儀をベースにしたもの。
 (下) リードグリーン色の「ザ・リビングストーン」を製作中の製作主任ジョン。
 【当ページ】
 (右下) 最初のレイヤーとなるオリブ色の「ミニ・デスク・グローブ」のゴア。
 (左下) 無数にある色の組み合わせ見本。
 (上) 水彩絵の具(左中)を何層も塗り重ねた後、ペインターのイシスが濃淡や細部を描いていく。



めに麻の繊維を混ぜ込んだ、焼き石膏を用いる。球体を形成するために必要な、精密な金型の製作を、F1自動車メーカーに委託することにした。

次の難関は、信頼性の高い世界地図を調達すること。ペラビーは楽観していたが、最初に入手した地図にサイズを通してみると、掃いて捨てるほどの間違いが見つかった。列島がまるごと抜けていたり、河川の流路が違っていたり、中東の都市名の綴りといったら当てずっぽうも良いところだった。ようやく使えそうな地図を見つけて購入し、ペラビーはそれを開いて毎日6時間、1年間かけて、グーグルマップを使いながら、地図を編集していった。なぜ、最初からグーグルマップを使わないのだろうか。「グーグルマップは素晴らしいですが、心に響くかという点、どうでしょうね。旅に出たいという衝動が湧いてくるかな。私は、正確で、今の世界を反映した地球儀をつくりたいのです。セピア色に褪せた骨董品でも、航海用の実用品でもなく、この世界の素晴らしさを実感できるような地球儀を。」

ペラビーは、製作する地球儀ごとに、地図を編集する。世界情勢の変化はもちろん、依頼主の個人的な要望にも対応する。「小さな地球儀の場合、国や首都は

載せられますが、都市名まで網羅するのは無理。それなのに、チューリッヒにある自宅を書き込んで欲しいという注文があったり、夫婦で住んだ都市に赤い印を付けて欲しい、なんて依頼もありました。」

地球儀づくりで最大の難所といえば、ゴアと呼ばれる、地図を細長い紡錘形にカットした断片を球面に貼りつけていく作業だろう。ゴアリングと呼ばれるこの工程を、ペラビーは18カ月かけて、辛抱強く完璧に行った。「手を少し滑らせただけで、国が消えてしまうこともある」という、繊細な作業だ。

私が工房を訪ねた日、新人のカーステイが、最小サイズの地球儀で練習していた。もう6週間になるが、彼女はまだ、ゴアをきれいに貼り合わせる事ができない。破れたり、重ね過ぎたり、隙間ができてしまったり。製品を任せられるようになるまで、あと半年はかかるだろうと、ジェイドは気長に見守っている。幸いなことに、カーステイは楽しそうに課題に取り組んでいる。彼女は毎日、仕事終わりに、その日一日、苦労して貼りつけたゴアを水で濡らし、剥がす。明日はまた、一からやり直した。

ペラビーも、最初から辛抱強い性格だったわけでは



ない。「若い頃の私には、何かを身に付けたら、上達したりするために、時間をかけようという発想は、全くなかったのです。でも、今は仕事を達成した時の喜びを知っています。地図の最後のピースを貼りつける時は、最高の気分です。ただ紙を貼りつけただけの球体が、俄然、生き生きとしてくるのです」。今の彼は、スタンドの上で地球儀が優雅に回転するよう、バランスを完璧に調整するために、何時間でも費やす。そして、山や川や島のすべてが正確に配置されるまで、決して手を休めようとはしない。

帰り際、ペラビーは私に、「ザ・チャール」という最大サイズの地球儀を回してみないかとすすめてくれた。1940年代に、英国の首相のためにつくられたものをベースにしたこの作品は、高さが1.5メートル以上もある。製作に1年を要した地球儀は、新しいオーナーへの引き渡しの準備も整い、ドアの横に置かれている。敬意を込めて、そっと力を加えると、アメリカから中国まで、滑るように優雅に動いた。それを、ペラビーが父親のように、誇らしげに見守る。

「どうにも、名残惜しくてね。みんなで、ため息をつきながら、見送るんですよ。」

PHOTOGRAPHS: JULIAN LOVE (PREVIOUS SPREAD) ANA SANTAL TOM BUNNING GARETH PON